

# 経営と

# 健康



## 日本経済の父「渋沢栄一」 第四回

講談師 一龍齋貞花



「渋沢栄一」を貞花独演会で口演、企業経営者も聴きたいと来会。

商才の片鱗をのぞかせた子ども時代から、徳川昭武に随行して欧州に渡り見聞を広めたエピソード、大蔵省に勤めたところまでを前編として語り、新聞編集者から、どこに魅力を感じますかと問われ、「個人の利益追求だけではなく、公共のためを考えた点が魅力、私は保護司として活動してきたが、後編では、更生保護事業に尽力したことにも触れたい」と話しました。

フランスでの一通りの行事が終わって一行は、スイス、オランダ、ベルギーと廻り、スイスでは大統領に謁見をはじめ時計工場など視察。マルタ島で砲台製作所など見学していた頃、日本の政変のニュースが新聞の片隅に。

「大政奉還？ まさか」

と、皆首をかしげる中、栄一だけは何となく、幕府は衰え、慶喜公なら政権を返上出来る人」と、思っていた。

栄一を、パリへ送り出してくれた原市之進が、三十八歳の若さで暗殺され、以前には平岡という腹心を失うなど、慶喜にとつて大きな痛手でした。

こうした内乱にもかかわらず、パリで規則正しい留学生生活が続ぎ、朝の乗馬訓練、日中は各種の学科。

フランス政府は、相変わらず好意的でナポレオン三世の狩りや軍隊の大演習に招待され、週に一度は競馬やサーカスに出かけるなど、平和で優雅な日々でした。

年号が改まった明治元年十一月三日、水戸藩主が亡くなり、昭武が水戸家を相続することになり日本に帰国。

一般的には、幕府崩壊のため急遽帰国といわれます。

明治元年日本に帰国

江戸は東京と変わっていた。横浜に着くや、二年前は徳川將軍の弟として華やかに旅立った昭武も、打つて変わって朝敵の片割れとして冷遇され、新政府の役人が全員の所持品を厳重に取り調べる。

栄一は、昭武の洋行費、パリ万国博の経費の決算書を水戸徳川家に提出。人々が驚くほどの明細なもので、食費や交際費まできちんと記帳し、少しのごまかしもなくはじめはきちんとする。

留学継続のつもりで節約し、また利益を図っていたので一万六千両の残金があり、その中から七千両余りでスナイドル銃一個小隊分購入し、水戸への土産に昭武に持たせてやりました。

帰国に当たり、万博の展示品や家具などを売り払った代金一万五千両がフランスから送金され、新政府はこれを国庫に入れようとしたが、

「これはあくまでも、徳川家から出されたものですから、慶喜公にお返しするの筋です」

と、静岡に隠棲している慶喜に送ります。この時売った浮世絵などが外国に残りました。

当時外国へ派遣された者は、費用が不足すれば請求し、余れば役得と着服するのに、栄一は余った金を返したの

で、  
「この男は、相当な者だ」  
と、新政府の役人も評価。

栄一と共に一橋家の家来となつたといこの渋沢喜作は、彰義隊を結成したものの、上野に続いて飯能でも敗れ、榎本武揚の軍に加わつて、土方歳三と共に函館五稜郭に立てこもつておりました。

数々の恩義を受けてきた慶喜が静岡で謹慎している。栄一は、自分も駿府におもむきお側に仕えるのが筋と考えていた。

十六歳の昭武は栄一に、  
「水戸へ帰つても先が思いやられる。家中に頼みに思う者も少ない。水戸へ来てもらいたい」

と、フランスでの栄一の働きを評価し、頼んだものの静岡行きの気持ちをみて、兄慶喜に手紙を書き、

「兄上に届けてもらいたい」

十一月半ば、昭武の手紙を持参し、謹慎している宝台院というお寺へ。

徳川家康が可愛がつっていた側室、二代秀忠を生んだお愛の方(西郷の局)の、

大きなお墓が山門を入つてすぐのところ

ろに建てられています。

粗末な部屋に通され待つことしばし、

「これが先の将軍のお住まいか」  
障子が開いて、なんと慶喜が一人であつてきた。

思わず、「へへーッ」

まさか自ら狭い部屋に入つてこようとは。

「このようなことに。なんとかほかに手の打ちようはなかつたのでしょうか」

「今更過ぎたことを、とやかく申しても詮ないこと。それより、昭武のフランス滞在中の様子を聞こうではないか」

フランスの土産話を語り、昭武の手紙を渡し、慶喜から弟昭武へ届ける返事を待つていたが、なんと別の者に持たせたと知らされ、

「將軍様などという人は、兄弟の情愛がわからないのか。自分が弟君の様子を伝え、その様子を聞いた手紙を弟君に伝えてこそ、兄弟の心が通じ合うというもの。それを別の者に届けさせたから、お前はここに残れとは……」

ところが数日後、

「渋沢が水戸へ行けば、昭武が重く用いるに違いない。そうなつては藩士たちからいじめられ栄一の身に災難が降りかかる。だから静岡に止めておく方が将来のためになる」  
という慶喜の真意がわかり、浅はかな考えを恥じ慶喜の厚遇に思わず涙したのでございました。

静岡藩の勘定組頭に任命されたが、暫くして辞職し、フランスで得た「合本法」から商法会所を設立。

米、肥料、塩、砂糖、紙、履き物などの売買。製茶、養蚕への融資をする。銀行と商事会社の業務を兼ねたような事業で、倉庫業、運搬業も行い、資金は藩と個人の双方から募つた。

ところが明治二年十一月、東京の明治政府から、栄一のパリでの財務の業績、静岡藩での企業経営の手腕を評価し、租税の頭かみに任命。なにしろ下級武士揃いの新政府高官は、金の計算が不得手だから見込まれたのです。

栄一は、仕官する気持ちなく、実権を握っている大隈重信のところへ断りに行く、

「旧主人慶喜公の恩義を忘れない事は床しい話だが、目の付け処が小さい。今の日本は働きのある者が力を合せて国を建て直す大切な時期だ。個人の恩義にこだわっている時ではない。」

君が仕官を断ることは、慶喜公が反対しているようにも受け取られる。それでは慶喜公のためにもよくない。国のためにこそ働いてくれ」

得意の弁舌に説き伏せられ、

「国のためならば」と納得。

大蔵大丞という次官に就任。

新政府は、廃藩置県を行い、旧大名の地方勢力をなくそうと考え、栄一はその案をかかされます。

しかし、三条実美、岩倉具視、西郷隆盛、木戸孝允、大隈重信、井上馨等首脳陣、いずれも自分の考えを主張し意見がまとまらない。特に西郷は、「廃藩置県を行えば旧土族が反対し、再び戦争が起きるかもしれない」と反対。予算編成で大蔵大臣大久保利通とも対立。

さればと栄一は、辞任し民間の事業を盛んにしようと決心。いよいよ実業家への道を歩もうというお話しは、次回のお楽しみに。